

# 日朝両国漢文訓読探源

『長田夏樹論述集（上）』第23章

（原載：『朝鮮学報』第97号，1980年10月；第99・100号，1981年7月）

第1節では「七月中」等の Koreanism 等で、考古学・歴史学研究者と言語史研究者が協働する契機を作った「稻荷山鉄剣銘」の人名表記と「百濟史料」のそれが論じられる。第2節では記紀の阿直岐、王仁の伝えた漢文読法について大島正健博士の説である「直読懸吐→朝鮮語訳→日本人の直読懸吐未習熟→日本式訓読法（転読法）」を引き、「直読懸吐の方が新しい」とこれを否定する。根拠として「常不輕菩薩品」を同一底経とする『釈譜詳節』とこれに20年以上遅れる『月印釈譜』の本文における「固有語から漢字音語への移行」を挙げている。「常不輕菩薩品」同一箇所の変遷にはさらに『法華経諺解』があり、それをも加えればさらに「軟→硬」への文体・語彙選択の変遷が跡付けられたと考えられるが、「訓にひらく→字音語を多用する」の変化を古代日本の状況と関係付けて論じた論は類を見ない卓見というべきである。第3、4、5節は日韓の借字表記法の概観であるが、その後の他の人の手になる概説とは異なり、先学の成果を踏まえ麗末の貼関文の吏読が引かれている。第6節では、1973年に発見された『旧訳仁王経』口訣について南豊鉉・沈在箕の解説を参照しつつ、日韓の漢文訓読について次のように述べている。

この反点符と傍訓の付された旧訳仁王経が我が国の訓点法と酷似しており、相互に独立して考案されたものでないことは一見して明らかであるが、それではこの訓点法はいずれの国から起こったものであろうか。（中略）漢字を用いての日本語表記形態が朝鮮の影響を受けて変遷したことを見てきたのに、訓点語においてだけ、日本から朝鮮へ伝えられたと考えることは無理であろう。

その後の韓国訓点資料研究の発展はこの推量を確実なものにしつつある。「朝鮮の影響を受けて変遷した漢字を用いての日本語表記形態の変遷」の例としては、第2節で、借音仮名の後代における放棄についての記述がなされているが、これも LEE Seung Jae (2010) 'On the Early Korean Numerals Inscribed on Wooden Tablet no.318', *Writings and Civilizations*, The Hunminjeongum Society, Seoul で示唆された「借音（百濟型）→訓主音従（新羅型）」という移行現象を、巧まらずして予見させるが如くである。（伊藤英人）